

新潟大学理学部同窓会

会報

第26号 2025.09.01



ごあいさつ
～同窓会に想う～

理学部同窓会会長
畠 野 弘 通

本年6月の同窓会総会で会長を仰せつかりました、化学科第23回の卒業生です。同窓会員の皆様のお力添えを頂きながら、微力ではありますが、その職を勤めて参りたいと考えております。ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

化学科支部の事業の件で恐縮ですが、昨年11月に、新潟大学創立75周年を記念した「ホームカミングデー」の企画を支援し、母校の先生方のご尽力により、施設見学と茶話会とを実施いたしました。往年の名教授を多数、来賓としてお迎えし、お話をお聴きして、多くの同窓生とともに、懐かしく楽しい時間を過ごさせていただきました。また、今年4月には、化学科卒業50周年の同級会を開催しました。スクリーンの画像を眺めながら懇談し、机を並べて学んだ学生時代の思い出に耽るとともに、各専門分野で活躍できる基礎が、母校で培われていたのだとも感じました。「同窓会」「同級会」の良さ、絆などを体感した「会」でした。

理学部同窓会は、1991年（平成3年）に、5つの学科同窓会を一本化する動きの中で、「学科間のゆるやかな連合体とし、学科独自の活動は制限しない」との条件付きで、発足しました。翌年に同窓会報が発刊され、理学部全体の同窓生が結びつく場が築かれました。1980年代後半（昭和55年代後半）から、数人の役員で学科の会報等の作成、郵送等に携わっていた役員の一員として、理学部同窓会の発足に万感の思いがあります。2017年（平成29年）には理学部理学科となり旧6学科は7つのプログラムに改組・新設されました。理学部同窓会の発足か

ら35年を経過した今、理学部同窓会の発足は、全学同窓会の発足を見越した動きだったように思えます。

本年7月に、新潟大学と全学同窓会との懇談会に初めて出席いたしました。学長、各学部長、理事、全学同窓会長、各学部同窓会長など、総勢45名程の参加でした。大学は創立76年、全学同窓会は発足20年です。全学同窓会は、国立大学の法人化に伴い発足しました。事業の第一に、「新潟大学への支援及び連携と協力の推進」と記載されています。こちらは大学の法人化による交付金の減少を見越した動きであったように思えます。懇談会で特に印象に残った報告が3つあります。1つ目は工学部からで、百周年記念事業で募った1.4億円の基金を学生等に還元する報告。2つ目は農学部からで、積立金の一部で庭の整備をし、学生の憩いの場を作っている報告。3つ目はある学科からで、同窓会に入会しない卒業生が近年増えており、入会してもらうためにアンケート実施を考えている報告。財政基盤の強化と帰属意識の醸成が課題と、改めて、感じました。

理学部同窓会についても課題は同じです。教育・研究・社会貢献に奮闘されている先生方、専門力・人間力を付ける活動に参加する学生達、交流・連携を深める会員の方々などを、支援できる財政力と各プログラム卒業生の学科・学部への帰属意識の醸成とが、これからの課題です。会報の決算報告でおわかりのとおり、卒業生も増加し、広報活動だけでかなりの経費が必要です。諸物価高騰で出費多難な折、誠に恐縮ですが、ご寄附等、よろしくお願い申し上げます。

学科支部同窓会、理学部同窓会、全学同窓会と、時代とともに、組織が大きくなりました。

終わりに、「全学」の文字がとれ、真に、「新潟大学同窓会」となる時を期待して、ごあいさつとさせていただきます。



理学部の近況

理学部長 高澤 栄一

令和7年4月より理学部長を拝命いたしました高澤です。微力ながら理学部の発展に尽力してまいりますので、同窓会の皆様には引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

昨年度は本学創立75周年を記念し、式典や支部主催のホームカミングデーが盛大に開催され、同窓生の皆様の交流が深まりましたことを嬉しく感じております。理学部ではこの3月に206名が卒業し、4月に215名の新入生を迎えました。数学と理学という自然科学の基盤をなす学問分野を中心に、自然の原理を深く理解し、それを社会へと還元していく力を育む教育・研究を推進しています。

現在、国立大学法人は第4期中期計画の4年目を迎え、中間評価に向けた報告書作成を進めています。理学部の取り組みの成果を最大限アピールすることが大切ですが、その一つとして、令和4年度から「インド太平洋地域の仮想フィールドを活用した科学人材育成プログラム」を推進中で、これまでの実績に対する中間評価で日本学術振興会より最高評価「S」を獲得しました。自然災害や環境課題への対応を目指すこの取り組みは、オンライン教材と現地調査を組み合わせ

たハイブリッド型教育として高く評価されています。

懸案の理学部A1棟の改修については、令和8年度の概算要求に向け準備を開始しました。改修後はサイエンスミュージアムの展示更新やデジタル講義室の整備を予定しており、教育・研究・共創の拠点として活用されます。現在、改修実現の機運が高まりつつあり、具体的な使用計画の策定を進めています。ただし、移転費用は自己資金での対応が求められておりますので、引き続き「理学部次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金」へのご協力をお願い申し上げます。

理学部では、平成29年度の改組から8年が経過し、この間の教員数の減少に伴い、教育・運営体制の見直しが必要となっています。加えて、地域社会との共創や社会的課題への対応も理学部の重要な使命となっています。その一環として、理学部では新潟大学公開講座「自然科学研究の最前線」をオンラインで開講し、自然科学に関心を持つ方々に広く学びの機会を提供しています。また、中谷財団の助成による中学生向け教育プログラム「N-Step新潟」や、JSTの支援による高校生向け「STELLAプログラム」も展開中で、今年度はさらなる受講生の拡大を目指して広報活動を強化しています。多くの中高生に新潟大学の科学人材育成事業に興味を持っていただけることを願っております。

今後とも、同窓会の皆様からの温かいご支援とご助言を心よりお願い申し上げます。



理学部 後援会 より

後援会会長 齋藤 潔

日頃より理学部後援会の活動にご理解とご協力を賜り厚く感謝申し上げます。また、新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私たち後援会は学生の皆さんの学業や学生生活全般にあたり、保護者の皆様とともに見守り、サポートし、大学の教育・研究活動に対しても、後援会として積極的に協力したいと思っております。

ところで、私にとって新潟大学は2度の学生時代（昨年まで社会人学生）を過ごし、人生の大事なウエートを占めた場所です。雄大な日本海が見える良き自然に囲まれた環境で新しい出会いを通して、人間の成長過程として良い影響を受けました。未だに当時の学生時代の友人と偶に会っています。また、還暦の社会人学生になり、周りの若い学生達と過ごし、研究会議や夜の運動会イベン

トや飲み会等に参加できてとても良かったです。ただ、中には意外とシャイで、デリケートな学生さんが割と多いと思われたので、周りで背中を押してやる環境があればと感じました。そこで、例えば、2年次からでも、気軽に参加できるイベントやグループ食事会等の補助などを後援会で支援できればと思いました。

今後も先生方と保護者が一丸となり、学生達が安心して、充実した学生生活が送れるように支援していきたいと考えております。

同窓会の会員の皆様におかれましては、大学の発展を願うとともに学生が自信をもって社会に羽ばたいていけるように応援して頂ければと思っています。今後ともご支援よろしくお願いいたします。

プログラムだより

数学プログラム

プログラム長 渡邊 恵一

2024年度は、年度を通じて新型コロナウイルス感染症の影響をほとんど受けることなく、学部学生48名(9月卒業含む)、博士前期課程13名、博士後期課程1名が無事に卒業・修了しました。

9月には星明考教授が2回目となる新潟大学優秀論文表彰を受けました。これは国際的に評価の高い学術誌に論文が掲載された著者に与えられるものです。学生の研究も活発に行われており、2025年3月には博士後期課程の小泉晶平さんが新潟大学博士学生支援プログラムシンポジウム 研究ポスター賞 優秀賞を受賞しました。また同時期に、学部学生の下峰溪人さんと博士前期課程の松崎出穂さんが新潟大学学生表彰を受けました。

会報25号の支部だよりでもお知らせがありましたとおり、10月18日には新潟大学創立75周年記念事業の一環として数学教室ホームカミングデーが初めて開催され、当数学教室の卒業生である佐藤浩一氏(日本精機株式会社代表取締役社長)から「交通事故のない未来のために ～ Head Up Display普及への道」の演題で、また古田高士氏(富山大学理学部数学プログラム 教授)から「関川先生の足跡紹介その2」の演題で貴重なお話を伺うことができました。11月29日には数学プログラム講演会が行われ、北澤千秋氏(新潟県立新潟江南高等学校)、田中すみれ氏(糸魚川市立糸魚川東中学校)が講演されました。

本年3月末に蛭川潤一准教授が退職され、南山大学に転出されました。蛭川先生は本学理学部に平成19年(2007年)1月に着任され、以来18年3か月にわたって多大な貢献をされました。ますますのご活躍を祈念致します。統計数学の重要性はますます強く認識されており、この分野の教員が早急に配置されるよう努めてまいります。



物理学プログラム

プログラム長 摂待 力生

物理学プログラムの人事異動としましては、2024年8月に物性実験グループの助教・廣瀬雄介先生が、これまでの活発な研究活動が評価され、日本原子力研究開発機構・物質科学研究センターに異動されました。今後、中性子散乱による物性研究に取り組まれます。また、今春3月には、物性理論グループの准教授・奥西巧一先生が、大阪公立大学の教授として異動されました。奥西先生は、

2000年に新潟大学に赴任されて以降、新潟大学で研究・教育・物理教室運営に尽力されてきました。さらに2021年からは大型科研費の学術変革領域研究(A)の研究代表者になられるなど、物性にとどまらない幅広い研究グループを形成され、活発な研究活動が評価されていました。今後のますますのご活躍を期待いたします。そして、松尾正之教授が本年3月を持って定年退職されました。松尾先生は2000年3月に新潟大学大学院自然科学研究科に助教授として着任以来、25年の長きにわたって新潟大学の教育研究に携わり、多大な貢献をなさいました。松尾先生は、原子核理論を専門とされており、原子核の大振幅集団運動や高スピン状態に関する研究、中性子過剰原子核や中性子物質、さらには中性子星に関する研究など、原子核の多体集団運動の研究に幅広く取り組んでこられました。理化学研究所と本学の連携においても長年中心的役割を担ってこられました。教育面においても、7名の博士学位取得者を輩出されるとともに、多くの大学院生・学部学生の指導をされてきました。大学の運営に関しても、理学部副学部長、自然科学系副学系長、理学部長、自然科学系長、災害・復興科学研究所副所長、大学院自然科学研究科長を歴任されました。自然科学系長は6年にわたり、また、理学部長・自然科学研究科長としては理学部と自然科学研究科の改組に取り組み、教育・研究の充実に尽力されるなどの貢献をされました。深く感謝いたします。また、新たな教員の加入もありました。4月に野垣康介先生が物性理論グループに、そして7月に藤本悠輝先生が原子核理論グループにそれぞれ助教として着任されました。今後のご活躍に期待します。

最近のイベントとしましては、2024年9月に理学部で「国際交流姉妹校による自然科学に関する第5回国際会議(ICNS2024)」を開催しましたが、物理学プログラムでも大学院生が英語でポスター発表、口頭発表を行いました。その中で、博士前期課程1年の荒木龍平君が、口頭発表賞を受賞しました。また、今年度6月6日に、恒例となっている「ケルビン祭」を開催しました。大学院入試説明会の後、物理学科卒業生の寄付金を基にした「中山賞」、同窓会物理支部の支援を受けまして、「同窓会奨励賞」・「同窓会新人奨励賞」を成績優秀な4年生6名、2年生4名に授与しました。卒業や進学へ向けての勉学、さらにその後の人生において多いに励みになることと思います。同窓会の皆様には、この場をお借りし御礼申し上げます。授賞式の後には、学生と教員による対話集会、大学院生・学部4年生による研究室紹介が行われました。ケルビン祭の最後は、理学部駐車場広場で、各研究室で様々な料理を出しあい、学部1年生から大学院学生、教職員の交流を深めました。

物理学プログラムでは、今春3月に37名が卒業し、その内25名が大学院へ進学しました(内、新潟大学は23名)。就職率は100%で、県内企業に4名、県外企業5名、県内

公務員2名、県外公務員1名、県外教員1名でした。大学院では、前期課程を27名が修了し、23名が企業に、1名が教員に、そして3名が後期課程へと進学しました。また1名の後期課程学生が博士の学位を取得しました。今後も社会で活躍する学生を育ててまいりますので、皆様方の温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



化学プログラム

プログラム長 梅林 泰宏

2023年度の化学プログラムは、推薦入学5名とFSP採択6名の1年生を新たなメンバーに加えてスタートし、後期には45名の2年生が化学プログラムに配属されました。また、三浦智明先生が令和6年6月1日付けで准教授に、中馬吉郎先生が令和6年10月1日付けで教授に、それぞれ昇任されました。



研究活動も活発に行われています。梅林泰宏教授と韓智海助教の共同研究が2024年7月8-10日にイギリス王立科学化学会会館(ロンドン)で開催されたDense ionic fluids Faraday Discussionsで“Speciation and dipole re-orientation dynamics of glass-forming liquid electrolytes: $\text{Li}[\text{N}(\text{SO}_2\text{CF}_3)_2]$ mixtures of 1, 3-propanesultone or tetrahydrothiophene-1,1-dioxide”と題して口頭講演され、これに先立ち、6月12日にプレスリリースされました。Faraday Discussionsは、物理化学、化学物理学、生物物理化学に関して、イギリス王立化学会が長年にわたり主催する一連の会議であり、招待講演と口頭講演は、会議での発言記録を含めて研究論文としてFaraday Discussions Journalに掲載されます。また、三浦智明先生の研究「光と物質の相互作用 スピン化学」が理学部研究紹介で、中馬吉郎先生の研究「「化学の視点」から副作用の少ない創薬を目指す～四重鎖DNAを用いた独自創薬モダリティ「IRDaptamer」の開発と応用～」が新潟大学

WEBマガジンで紹介されました。さらに、学生による学会発表では、のべ5件が表彰されました。

9月26-28日には、The 5th International Congress on Natural Sciences with Sisterhood Universities (ICNS2024)が本学で開催されました。インド、台湾、マレーシア、フィリピンの4か国、計6大学から参加がありました。R. Jagirdar教授(Indian Institute of Science)による基調講演“Tandem heterogeneous catalysis for reversible hydrogen storage in liquid organic hydrogen carriers”に加え、口頭講演23件とポスター講演14件の計38講演の研究発表が行われ、活発に議論されました。

令和6年度は、41名の学部学生と16名の修士学生が卒業・修了し、社会に巣立っていきました。



生物学プログラム

プログラム長 長束 俊治

生物学プログラムでは、2025年3月に学部卒業生23名、大学院博士前期課程修了生12名を送り出しました。学部卒業生のうち20名が大学院へ進学し、そのうち18名は本学の大学院自然科学研究科に進学しています。また、前期課程修了生のうち1名が博士後期課程へ進学しました。ここ数年、前期課程への進学者数が増加していることに加え、後期課程への進学者も着実に増えています。現在、博士後期課程には7名が在籍しており、今後も大学院、特に博士課程への進学者数を増やしていくことが、生物学プログラムの将来にとって重要な課題となっています。

令和7年度の新入生のうち、生物学プログラムへの推薦入学者は5名、Frontier Study Project(FSP)の学生も5名でした。また、生物学プログラムに配属された3年生は、3年次編入生2名を含む合計27名でした。昨年度から再開した新入生・編入生との懇談会も、今年度は従来の形式で実施することができました。また、昨年9月末には、大学院生を含む夏の懇談会を生協食堂にて立食形式で開催することができました。

このように、各種行事はほぼコロナ以前の状態に戻りつつありますが、学生の行動様式には大きな変化が見られます。遠隔会議やウェビナー、SNSの普及により、情報の入手手段が多様化しており、教員や大学による情報発信のあり方にも変化が求められています。また、生成AIの急速な発展と普及により、授業や研究の手法にも変化の波が押し寄せています。

一方、遺伝子や病原体といった生物学リテラシーは、日常生活においてもますます重要性を増しています。新型コロナウイルスの流行は収束に向かいましたが、本稿執筆時の5月現在、百日咳が全国的に流行しており、生

物学の知識が市民生活に直結する場面が今後も増えていくことが予想されます。

このような状況下で、生物学プログラムが教育・研究を通じて社会に貢献すべき役割は一層大きくなっていると感じています。教員一同、プログラムの継承と発展に向けて引き続き努力してまいります。同窓会の皆様におかれましては、今後とも温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

今年の3月、栗田裕司先生が退職し、4月には葉田野希先生が准教授、柴田翔平先生が助教として新たに着任されました。葉田野先生は信州大学で学位を取得後、長野県環境保全研究所に6年間勤めた後、新潟大学に着任され、堆積学・古土壌学が専門で、地質教室の初の女性教員です。柴田先生は茨城大学で学位を取得し、日本学術振興会の特別研究員を経て着任され、火山地質学が専門です。現在、地質科学の教員は10名です。

今年の春、24名の4年生が卒業し、そのうち16名が新潟大学博士前期課程に進学しました。進学率は67%で、将来の発展が期待されます。就職先は建設コンサルタントに2名、資源系に1名、公務員に2名、教員に1名、一般企業に1名です。博士前期課程では5名が修了し、うち2名が後期博士課程に進学し、1名が建設コンサルタント、1名が資源系(行政)、1名が一般企業に就職しました。

来年度4月から、「現代社会文化研究科」と「自然科学研究科」が統合され、「総合学術研究科」の修士課程が新設されます。令和10年にはこの総合学術研究科に博士課程も移行し区分制大学院となります。地質科学は「生命環境・食料科学プログラム」の「地質学分野」として位置づけられます。この変更に対して、多くの人は大学院の縮小を印象付けられるかもしれませんが、大学の説明では「人文社会科学と自然科学の知を融合し、単一の専門知では解決できない課題に対処する「総合知」の創出が必要」とされています。しかし、現在の自然科学諸分野において「総合知」がどの程度求められているのか、疑問を抱く人も少なくないでしょう。

10月の大学祭では、恒例の自主ゼミの展示、「秘酔」、「地質科学科の未来に向けての集い」が行われます。卒業生もぜひご参加ください。今後を見据え地質科学プログラムの魅力を継承し、研究・教育の発展を続けるために、皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。



自然環境科学プログラム

プログラム長 宮崎 勝巳

自然環境科学プログラムでは、2024年度は20名の卒業生を送り出しました。11名が大学院に進学、県内外の民間企業への就職5名、公務員就職2名、その他(大学院再受験等)2名の内訳です。具体的な進学・就職先については、理学部ホームページのメニューから、就職・進学支援→卒業生の進路→自然環境科学プログラム、とお進み下さい。彼らの今後の活躍を、大いに期待いたします。

昨年10月の、自然環境科学プログラムへの新規配属学生数は12名に留まりました。これは2017年度の理学部1学科制への改組以来、最少人数となります。いろいろ理由は考えられますが、年による増減は致し方ないこととして、少数精鋭、しっかりと教育して参りたいと思います。また今年4月には、三年次編入生1名を新たに加えました。

昨年12月4日には恒例の学生対話集会が開かれ、その日の夕刻より、3年生主催の1・2年生歓迎会が、生協第一食堂で開催されました。これは二学期に新たに当プログラムに配属された2年生と、当プログラムに推薦及びFSPで入学してきた1年生とを歓迎する催しですが、飲食を伴う形式での開催は実に2019年以来となります。コロナ禍による、このような催しのブランクが長かったせいか、最初のうちは学生・教員ともごちなささが否めませんでした。徐々に打ち解け出し、最終的には有意義な交流が実現出来ました。

当プログラムを含めた理学部のほとんどのプログラムでは、これからの数年間で教員の大量定年退職が見込まれており、教育・運営面における様々な難しい課題への取り組みが、待ったなしの状況となってきました。同窓会の皆様方におかれましては、この難局を乗り越えるため、より一層のご指導ご鞭撻について、どうぞよろしくお願いいたします。



フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 本田 明治

当プログラムでは2025年3月に17名(農学部と合わせると29名)の卒業生を第5期生として送り出しました。接続する大学院フィールド科学コースからは、博士前期課程修了者19名を送り出しています。2025年4月からは4年生11名(農学部と合わせると21名)が各研究室に配属されました。また、博士前期課程には22名、博士後期課程には3名が進学しています。大学院コースは他プログラム、他大学からの進学が増えているのも特徴です。

学生・教員の諸活動はコロナ禍以前に増して活発になってきています。恒例のフィールドナビは今年は6月6日に附属図書館で開催しました。本学の特色でもある、多様な自然フィールドを対象とする30以上の研究室が参加して研究活動を紹介するイベントで、当プログラムが開設された2017年以来継続して実施されています。対象は主に理学部・農学部1～3年生で、当プログラムへの配属を考える学生、既に当プログラム配属済で所属研究室を探す学生など約80名が参加しました。終了後の懇親会は野外バーベキュー形式で実施され、漸くコロナ

禍の完全終焉を実感した一日でした。

当プログラムも9年目を迎え、学生・教員も一層充実してきておりますが、研究の対象となる地球環境は今大きく変化・変動し始めています。昨夏(2024年)は2年続けて経験のない猛暑だった一方、24/25年冬は各地で記録的な大雪に見舞われるなど、異常が異常ではないニューノーマルともいえる状況です。これからの地球は気候変動に伴う生態系等の環境変化、複合災害の頻発など激変する自然との共生の道を探る必要があり、難しいかじ取りが求められる時代の中で活躍する人材を世に輩出する必要性を一層感じています。



コラム 県民の健康を守り、安全で快適な環境をつくるために

新潟県保健環境科学所 所長 水戸部 英子

新たな感染症の出現やウイルスの変異、再興感染症の流行、地球温暖化の影響など、私たちを取り巻く生活環境は著しく変化しています。このような状況の中、新潟県保健環境科学研究所は、本県の保健衛生・環境行政を科学的・技術的に支援する中核機関として、様々な調査研究、試験検査などを行っています。また、食中毒や環境汚染事故などの発生時には迅速な調査・検査を行い、実態把握や原因究明など、県民の安全・安心な暮らしを支える一翼を担っています。このような業務を通じて、当所では、新潟県総合計画の将来像「安全に安心して暮らせる新潟」の実現を目指し、県民の健康を守り、安全で快適な環境をつくるために取り組んでいます。

当所の組織として、調査・研究に携わる調査研究室があり、保健衛生分野を担当する細菌科・ウイルス科・生活衛生科と環境分野を担当する情報調査科・大気科学科・水質科学科の計6科で構成されています。環境分野の3科(環境3科)には、環境職という専門職の職員が配属され、新潟大学出身の職員も多数在籍していますので、今回は環境分野の調査研究等について紹介させていただきます。

当所の調査研究は、社会的ニーズや研究所に求められている役割等を考慮した課題について実施しています。環境分野では、これまで都市・生活型公害や化学物質関連の環境汚染調査及び酸性雨問題等を中心に調査研究を進め、先見的立場から様々な環境問題の課題と実態の解明に努めてきました。近年では、環境中のマイクロプラスチックや有機ふっ素化合物

(PFAS)に関連した調査研究に取り組んでいます。

また、県は気候変動適応法(2018年12月1日施行)に基づき、地域における気候変動影響及び気候変動適応に関する情報の収集、整理、分析及び提供並びに技術的助言を行う拠点として、2019年4月1日に「新潟県気候変動適応センター」(以下、「適応センター」という。)を当所に設置しました。適応センターでは、県内の気候変動の現状・将来予測及び影響についての基礎データの収集・提供を行っています。そして、今年度から適応センターに関連した調査研究「新潟県内における暑熱に関するデータ収集及び解析と環境質への影響」を開始し、県内での気候変動適応策の検討や県民への情報発信に資するための取組を環境3科で行っています。

今回紹介できなかった保健衛生分野の調査研究等も含め、詳細については当所HPをご覧ください幸いです。



保健環境科学研究所
ホームページ



新潟県気候変動
適応センター
ホームページ



全学同窓会からのお知らせ(今年度の交流会について)

全学同窓会では令和7年10月18日(土)14:30～ANAクラウンプラザホテル新潟2階「芙蓉」で今年度の交流会を開催いたします。内容は、第1部が、講演会「新潟大学の顔・門標四文字」(講師:岡村浩(新潟大学教授))で、第2

部が、特別対談「『人生いろいろ』やっぱり新潟推し」(あおいさん(新潟芸妓)と遠藤麻理さん(フリーアナウンサー)の対談)です。終了後、懇親会も予定されております。希望される方は事務局にメールにて連絡ください。

支部だより

数学科

支部長 轡田 勝祐

【令和6年度】下記の行事の経費等の一部を補助することで数学プログラムの取組に支援を続けました。

数学プログラム 国際交流事業：9月に新潟大学で開催された国際交流姉妹校による自然科学に関する第5回国際会議(ICNS2024)に合わせ、数学プログラム主管の「さくらサイエンスプログラム」(科学技術振興機構の国際交流事業)で台湾から8名の留学生が来学されました。

数学プログラム 講演会：県立新潟江南高等学校教諭 北澤 千秋さん(平28.3卒)、糸魚川市立糸魚川東中学校教諭 田中 すみれさん(令和元.3卒)が同窓・先輩として、学生の皆さんに経験をふまえ講演されました。

理学部数学教室 ホームカミングデー：新潟大学創立75周年記念事業の行事として行われ、数学プログラムと数学科支部で共催いたしました。会報25号でお知らせしましたが、同窓お二人が講演され、楽しい一時を過ごすことができました。

- ・日本精機株式会社代表取締役社長 佐藤 浩一さん(昭63.3卒)「交通事故のない未来のために ～Head Up Display普及への道」Head Up Displayを搭載した実車やデモ機を持参いただき、実際に体験することもできました。

- ・富山大学理学部数学プログラム教授 古田 高士さん(昭61.3卒)「関川 浩永先生の足跡紹介その2」関川先生の素晴らしい業績を改めて拝聴することができました。

【令和7年度】支部役員会(R7.4.26)をオンライン開催し、前年度決算・事業内容、本年度予算・事業計画を協議し、同窓会役員会(5.10)で報告しました。同窓会総会(6.14)当日には、16人で支部としての会合をもつこともできました。

なお、支部名については今後、同窓会役員会で審議され、理学部の現状に合わせて名称変更がされる見込みです。支部の情報は、数学科支部HP※でお知らせしています。

※mathweb.sc.niigata-u.ac.jp/~sugaku-dosokai/index.html

物理学科

支部長 麩沢 祐一

物理支部は、例年通りの活動をしてまいりました。その中でも、できるだけ理学部物理学プログラムの学生を支援する活動ができないかと考えてまいりました。

今年も、6月6日(金)のケルビン祭で学生を表彰する際に、4年生の成績優秀者の学生3人に物理学科同窓会賞の副賞としてそれぞれ1万円の図書カードを贈呈し、他に新人賞として5千円の図書カードを4人に贈呈しました。

このような活動をきっかけに学生の皆様と触れ合う機会が増えることにより、交流も盛んになるのではと思って継続している次第であります。

今後ともご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

化学科

支部長 田邊 薫

同窓の皆様、初めまして。今年度から支部長を務めます第31回卒の田邊薫と申します。畠野前支部長が理学部同窓会長就任に伴い化学科支部長を退任することとなり、その後任として今年度から支部長を務めさせていただくこととなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、昨年度は化学プログラムへの支援として、次の二つの事業を行いました。

1 「化学科ホームカミングデー」支援事業

2 化学プログラム学生表彰支援事業

支援額はそれぞれ10万円、5万円です。これら化学プログラムの事業は、佐藤先生、後藤先生のご担当により実施されたもので、お二方とも化学科の同窓生でもあります。

1では、新潟大学創立75周年を記念して行われた事業を支援したものです。化学科ホームカミングデーは昨年11月23日(土)の午後に実施され、施設見学や茶話会で懐かしい恩師や同窓生との楽しいひと時を過ごさせていただきました。2は本年3月、化学プログラム4年生のうち成績優秀者3名をプログラム長と支部長の連名で表彰し、表彰状とともに賞金を授与しました。これら支援事業が、学生や同窓生の活動、交流の一層の活性化に繋がれることを願っています。

この他にも、化学科支部の2名を、理学部同窓会から全学同窓会に運営委員として派遣しています。旧聞にはなりますが、全学同窓会から寄贈されたライブカメラで現在の五十嵐キャンパスがご覧いただけます。理学部の方を向いているカメラもあり、遠景に小さくではありますが、理学部棟も見えます。「新潟大学キャンパスカメラ」で検索すれば見つかりますのでご覧ください。

化学プログラム支援事業として学生表彰支援事業は今後も継続的に実施していく予定ですが、同窓生どうしの交流を後押しするような事業なども継続的に実施できればと考えています。新規事業は引き続き募っています。学部同窓会をとおりお問い合わせいただければ幸いです。

今後とも支部活動へのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

生物学科

支部長 藤原 昌晴

このたび、理学部同窓会の生物学科支部長に推薦いただきました藤原昌晴です。永年にわたり同窓会を支えてこられた歴代支部長をはじめ、役員・会員の皆様に深く敬意を表しますとともに、その責務の重さに身の引き締まる思いです。

本同窓会は、卒業生同士の親睦を深めるとともに、母校の発展を支援する重要な役割を担ってまいりました。近年では、同窓生の多様な進路や居住地域の広がりにより、活動への参加が難しくなっている面もございます。また、若い世代とのつながりや、情報発信の在り方も見直しが必要な時期を迎えています。

こうした課題を踏まえ、今後はオンラインを活用した交流の促進や、世代を超えたネットワークづくりを模索しながら、時代に合った同窓会の形を築いていきたいと考えております。会員の皆様の声を大切に、開かれた、参加しやすい同窓会を目指してまいります。

何卒、変わらぬご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



支部長 豊島 剛志

本支部が支援し、2024年10月19日～10月20日に新潟大学Week2024の「地質まつり」と「地質科学プログラムの未来に向けて：卒業生と在校生の集い(第1部・第2部)」が新潟大学75周年事業として実施されました。「地質まつり」、「集い(第1部)」ともに多数の参加者を得て大盛況でした。「集い(第1部)」では講演だけでなく、座談会やポスター発表会が行われました。これらイベントを通じ、卒業生・在校生・教員だけでなく市民の方々との交流が対面で深められました。さらに、今年度は久々に「集い(第2部)」も開催され、在校生および卒業生の研究や仕事などについて深い交流が図られました。しかし、長らく新年会など、支部内の懇親を深める機会が行われていません。今後、その機会を設ける必要があると考えています。

2025年度の集中講義「土木地質学」は、昭和60年度卒の大河内誠氏(NPO法人ジオプロジェクト新潟 事務局長)が担当し、対面授業を行う予定であるとのこと。

「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら、新潟大

学理学部の地質」と言われる伝統が続くよう、当支部はこれからも教室への協力を続けていきます。



支部長 尾原 祥弘

いつも同窓会の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。同窓生の皆様におかれましては、それぞれの立場で、家庭や職場などで様々な役割を担い、日々ご奮闘のことと存じます。

さて、昨年度の事業について報告いたします。昨年度は、11月9日(土)に総会、懇親会を行いました。懇親会は少人数の参加でしたが懐かしい顔ぶれが集まり、和やかな雰囲気の中で楽しいひと時を過ごしました。そして、これまで継続して行ってきた図書寄贈事業ですが、学生の皆様の要望を十分に聞く体制が取れない状況が続いているため休止することとしました。同窓会の目的の一つである後輩支援を行わないことは非常に残念ですが現状についてご理解いただきたいと思います。

今後については、学生を支援していくためにも自然環境科学プログラムの先生方との連携を深めていく必要があると考えています。今年度の懇親会にはプログラムの先生方にもご参加いただけるようお声がけする予定です。また、来年度以降は懇親会と併せて退官された先生をお祝いする会も行います。最終講義の連絡等もInstagram等を通してお届けします。

これからも同窓生の皆様が健康で充実した日々を過ごされることを願っております。創環会の活動に対するご意見ご要望もお待ちしております。お気軽にお寄せください。

首都圏同窓会

と私

理学部首都圏同窓会の現況

首都圏支部長 安藤 勝利

日頃の理学部首都圏同窓会へのご理解ご支援に感謝いたします。

今年の首都圏同窓会は6月28日に東京新潟県人会館で開催されました。Webでの配信も3年目となり、多数の参加があり役員一同感謝しております。

恒例のサイエンスセミナーでは、高澤理学部長による理学部の現状と課題について、大野理学部教授による超伝導の魅力について、物理学科卒の山田泰一さんから原子核の不思議について講演を頂きました。その後、総会を行い、ケータリングによる懇親会の開催となりました。

今年は、10月26日に東京新潟県人会館にて全学首都圏同窓会が開催されます。当日は牛木学長、高澤理学部長をお招きし、国立科学博物館の神澤研究主幹のご講演を頂く予定です。理学部首都圏同窓会は幹事学部として開催に向けて幹事一同全力で頑張って準備しており、詳細が決まれば、理学部首都圏同窓会のHPに掲載する予定です。

また、首都圏同窓会のPR活動として、紹介リーフ

レットを編集作製し、今年の理学部卒業生及び首都圏在住の理学部同窓会会員に配布いたします。

皆様におかれましては、理学部首都圏同窓会に集い、新しい知見に触れつつ、総会後の懇親会等で旧交を温めるよう奮ってご参加下さいますことお願い申し上げます。

今後とも理学部首都圏同窓会の活動に対し、ご支援ご協力をお願いいたします。



若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2022年卒 山本 祐己

毎日の生活に欠かせないものを支える仕事がしたいと思い、近畿地方の鉄道会社に就職しました。現在は列車の乗務員を目指すため、駅係員として目的地へのご案内やお手伝いが必要なお客様への介助、ご希望通りの切符を発売するといった仕事をしています。



数学の勉強や研究で身に着けた「基本をおろそかにせず、なぜそうなるのか、なぜそのようにするのかを常に考える習慣」は今でも大切にしています。ルールや手順が定められている理由を理解し、実行していくことで誤った行動や、重大な事故を防ぐことができるので、今後も安全で安心な鉄道を築いていくために継続していく所存です。

職場の方々、これまでの人生で支えてくださった方々への感謝を忘れずに、これからも精進していきます。

きる環境に身を置けることは、とても刺激的で楽しいと感じています。また、業務では知識だけでなく、柔軟な対応力やコミュニケーション能力の重要性を実感する日々です。現在の業務では大学で学んだ知識を直接活かす機会は多くありませんが、学ぶ姿勢や周囲との関わり方は、学生時代に培ったものが基礎となっていると感じております。これからも日々成長し、一人前の技術者として貢献できるよう努めていきたいと思っています。

生物学プログラム

2022年卒 飛騨野 昂太



自然科学研究科を修了後、研究職として原薬製造に携わり2年目となります。この1年は長期間・大人数での研修に始まり、山口県への引っ越し、部内最大スケール試験の担当となるなど、これまでにない大きな環境の変化を体験しました。そんな中でも目標を見失

わず乗り越えてこられたのは、ひとえに大学時代、特に研究室所属時代の経験があったからだと思います。専門知識だけでなく、物事の本質的な考え方や仕事への取り組み方、人間関係の構築方法など、本当に沢山のことを学びました。失敗や後悔は多くありましたが、その経験を活かして仕事、人間関係共に良好な社会人生活を送ることができています。これからも学生時代を支えてくださった方々への恩を忘れず、引き続き目まぐるしく変化する環境に挑戦していく所存です。

物理学プログラム

2021年卒 出井 和樹



私は2023年に自然科学研究科を修了し、現在は開発職として素材メーカーに勤めています。暮らしを豊かにする産業機器・製品には、表面上には見えない素材製品が必要不可欠です。産業の上流に位置している素材メーカーは、一般消費者と直接関わる機会が少ないで

す。しかし、縁の下での力持ちとして社会に貢献する姿勢に魅力を感じ、私はこの業界を志望しました。入社当初から担当している化合物半導体結晶の品質向上試験は、大学時代の研究テーマである純良単結晶育成の知識・経験を活かせる業務です。試行錯誤しながら仕事を遂行していく日々は大変ですが、素材製品の開発を通して暮らしを支えている毎日にやりがいを感じています。

地質科学プログラム

2023年卒 福田 倫太郎

私は2022年度に地質科学プログラムを卒業し、2024年度に地球科学コースを修了しました。現在は独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構で、日本の金属鉱物資源の安定的な確保のために働いています。現在世界は脱炭素社会の実現に向けて、電気自動車などに必要なレアアース・レアメタルの確保に必死になっています。しかし、今の日本は資源のほとんどを海外からの輸入に頼っている状況です。現在は大学で学んできたことの発展内容である「鉱床学」を学んでおり、この夏から海外で、大学で得た地質調査のスキルを活かしながら鉱床ポテンシャルを評価していく業務に携わる予定です。このような仕事が、私たちの持続可能な未来に繋がっていくことを願っています。



化学科

2021年卒 川名 結衣

修士課程を修了後、電子部品メーカーに勤務し、物性の評価技術開発に携わっております。社会人になり、毎日が新しい発見の連続であり、学ぶことの多さに驚かされています。業務を通じて知識を深め、経験を積みながら成長で





自然環境科学科

2023年卒 須貝 航祐



私は自然環境科学プログラムを卒業し、自然科学研究科を修了しました。その後は新潟県立自然科学館にて学芸員として勤めています。仕事内容は展示の維持管理はもちろん、小学生向けの科学教室の企画、運営など行っています。幅広い科学的知識が必要となり、

改めて自分の異分野の勉強を行う日々を送っています。苦戦すること多いですが、学生時代に培った自然科学に対する知見を総合的に捉える力を生かすことができ、苦しみつつも受講した講義1つ1つは無駄ではなかったんだな、と実感しています。

今後は学生時代に研究対象としていたクモヒトデについての教室を行うことを目標に頑張っていきます。参加した子供たちが馴染みのない生物に触れた時どんな反応をするのか今から楽しみです。



フィールド科学人材育成プログラム

2023年卒 津守 智也



学生時代の大きな思い出の1つは研究活動です。私は気象学を専攻し、多くのことを経験しました。先生や先輩方との議論、沖縄県での観測、日本各地での発表を通して、気象学的な知識に加えて社会に出てからも血肉となる姿勢を学ばせていただきました。当時を振り返ると、思い通りにいかないことが多く、試行錯誤の連続でした。一方で好きなことに向き合い、没入できたあの時間は、何ものにも代えがたく非常に充実したものでした。現在、私は自然災害と接点のある業界に身を置き、業務に励んでいます。新潟大学で吸収した自ら考え、主体的に行動する姿勢を生かしながら今後も邁進する所存です。

振り返ると、思い通りにいかないことが多く、試行錯誤の連続でした。一方で好きなことに向き合い、没入できたあの時間は、何ものにも代えがたく非常に充実したものでした。現在、私は自然災害と接点のある業界に身を置き、業務に励んでいます。新潟大学で吸収した自ら考え、主体的に行動する姿勢を生かしながら今後も邁進する所存です。

理学部同窓会特別会費

納入者御芳名(敬称略)

令和7年6月末現在

● 数学科支部

土屋 和平	田中 宏	細野 晃	三浦 敬
高橋 芳延	山口 真理	永原 秀十志	仲丸 政美
伊藤 道一	伊東 孝芳	富田 保宏	牛丸 智博
岩田 隆子	縹 詳子	城塚 敏道	今井 明子
堀 行	福田 世喜	玉木 正己	玉田 鉄平
樋浦 卓嘉	吉成 毅	石井 一也	関野 文瀬
寺尾 芳樹	原 幸仁	田中 環	斎藤 裕
金子 正義	樋熊由紀夫	佐藤 浩一	宇津木 潔朗
金城 義行	大坂 久雄	安川 志津子	伊藤 真知子
高橋 哲夫	竹内 正文	清水 美和子	高橋 峰洋
高橋 稔	青木 孝史	中井 良	吉田 貴史
永井 健樹	浅野 学	上川 芳浩	上野 卓政
井村 悦子	轡田 勝祐	小川 正樹	
石田 雅義	丸山 善久	伊皆 嘉樹	
田辺 真知子	吉田 裕史	角井 伸一	

● 化学科支部

長尾 典	土屋 真知子	井戸 清治	長谷川 一浩	板垣 健
松澤 澄江	猪股 律子	石田 秀一	後藤 紀子	相原 郁美
半田 進	浅井 恒雄	尾崎 恭子	岩崎 匡臣	村山 明弘
赤沢 宏	藤田 省三	山岸 良一	宮本 良弘	佐藤 久成
丸山 宏	島野 弘通	谷口 素子	栗林 英明	吉田 勝美
松尾 昭夫	佐々木 弘子	杉山 真理子	渡辺 順一	小野 啓子
宇津木 晨晴	福島 幹雄	青柳 義昭	斎藤 博之	近藤 健一郎
岩野 宜哉	東田 良和	川俣 治	佐藤 友美	渡辺 勲
青木 英二	本間 悟	三ツ寄 敏雄	沼崎 恭子	高橋 聖美
吉川 義雄	山口 衛	森田 朗	小林 宏明	菊地 真人
渡辺 房子	中村 淑江	田邊 薫	鈴木 華奈子	長谷川 太一
渋谷 貞雄	百瀬 泰紀	菊地 優基	石山 友英	伊藤 統
羽角 孝	小川 茂樹	井神 いずみ	橋本 一人	関野 宗朗
星 健治	羽深 等	三上 正人	小嶋 素志	宮川 雅人
殿内 重政	村山 茂子	飯田 英典	棚橋 美咲	

● 物理学科支部

森山 久夫	白川 保憲	羽賀 成基	大木 裕
赤塚 節	八木 隆志	有馬 敏幸	五十嵐 誉廣
畑野 清司	金澤 光隆	高橋 透	小関 賢
柳 雄二	佐藤 三男	伊藤 嘉亮	山崎 美穂子
小林 一男	上林 俊一	武田 勝利	安野 健太
丸山 敬	稲田 秀一	山岸 靖宏	上野 高文
小川 稔	渋谷 孝雄	水谷 先宏	越後 弥大
本間 正宣	佐藤 晋	武田 政義	加賀谷 奈保子
伊藤 繁夫	牧口 一男	赤坂 俊彦	石井 智
橋本 俊彦	鈴木 俊男	木村 祐伸	北見 秀樹
山口 喜啓	石川 富二男	風間 睦男	菅野 義博
鈴木 厚人	前田 義憲	梅田 智子	玉木 駿佑
海老名 郁夫	田中 隆明	水島 清彦	比嘉 駿
小海 哲	川田 尚	山田 徳昭	永井 玲南子
若林 恒夫	野坂 孝雄	黒澤 昌基	中島 大翔

● 生物学科支部

島田 隆道	荒木 勉	石坂 均	藤原 信一	須永 亮
伊東 和江	久和 彰江	大久保 易	猪熊 正則	桐山 秀明
小林 道頼	大西 ち子	井村 宏之	頓所 裕史	桐山 真由子
兒島 英介	大畑 秀穂	高須 俊克	榎本 喜美子	宮島 佳那子
長谷川 博	林 正栄	磯部 浩伸	佐々木 哲	木村 太郎
能勢 陽子	小野寺 隆	笹川 通博	門脇 康之	森野 純
長谷川 英男	佐藤 克美	伊藤 達朗	武市 真吾	
箕輪 正和	木本 鑑乗	久保 隆之	山崎 浩太郎	

● 地質科学科支部

倉又 孝夫	笹川 一郎	青野 道夫	山本 邦仁	安藤 勸
大西 淳	川島 信行	五十嵐 聡	渡部 直喜	中澤 健太
山岸 俊男	佐藤 和平	北脇 裕士	佐久間 幹	八木 郁恵
石橋 輝樹	中水 勝	滝本 俊明	榎本 武敏	長谷川 千博
加藤 靖夫	横堀 正純	宮本 弘介	岩田 孝司	佐藤 倫史
山野井 徹	中川 充	田中 力	小島 玄生	
吉田 滋	武田 茂典	志村 俊昭	竹内 均	
二瓶 文雄	飯野 芳則	柿崎 聡	小倉 裕美	
永島 礼二	清水 功	佐藤 壽則	大河内 晴香	

● 自然環境科学科支部

杉山 博崇 小田 鼓乃佳

● フィールド科学人材育成支部

飯澤 広晃

● 旧職員

赤井 純治	中田 のり	徳江 郁雄	古澤 昭
渡部 剛	石塚 紀夫	古橋 勝久	池田 清美

表 1 2024年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明	
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,131,000	131,000		
	終 身 会 費	4,000,000	3,980,000	-20,000	新入生 199名×20,000円	
	特別会費・寄付金等	1,000,000	1,151,000	151,000	ゆうちょダイレクトは237名、らくうるカードは50名(含名簿購入代金4,400円)	
	他 会 計 繰 入 金		0	0		
	雑 収 入	80,000	88,817	8,817	預貯金利息、全学同窓会資料会員配送費清算(85,801円)	
	前 年 度 繰 越 金	1,774,802	1,774,802	0	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金	
	収 入 合 計	6,854,802	6,994,619	139,817		
支出の部	会 議 費	175,000	183,458	8,458	諸会議交通費、会場費	
	広 報 費	2,160,000	2,029,948	-130,052		
	「会報」発行費用	400,000	389,015	-10,985	理学部同窓会誌「会報25号」(7,600部)印刷代	
	「理学部は今」発行費用	550,000	537,240	-12,760	理学部機関誌「理学部は今」(7,500部)費用分担	
	会員宛資料配送費	1,200,000	1,096,578	-103,422	7,091名分 その他資料印刷費・配送運賃	
	そ の 他	10,000	7,115	-2,885	H P 運営費	
	事 業 費	1,280,000	1,000,000	-280,000		
	理学部支援事業費	800,000	800,000	0	国際会議(ICNS2024)補助費(50万円)、卒業祝賀会補助費(30万円)	
	支部事業補助費	450,000	200,000	-250,000	2支部(数学、地質科学)に助成	
	名 簿 編 集 費	10,000	0	-10,000		
	そ の 他 事 業 費	20,000	0	-20,000		
	負 担 金 等	500,000	490,045	-9,955	全学同窓会賦課金(30,000円+500万円×9.1954%)+275円(税込手数料)	
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円=460,000円	
	事 務 諸 経 費	123,000	139,379	16,379	光熱水費、郵送料、払込手数料・料金、印刷費、消耗品、プリンタ代等	
	事 務 局 費	500,000	540,600	40,600	事務局人件費	
	人 件 費	0	0	0		
	予 備 費	656,802	4,400	-652,402	予備費・調整費(特別会費に振り込まれた名簿購入費の支出)	
	他会計(積立金特別会計)繰出金	1,000,000	1,000,000	0		
	支 出 合 計	6,854,802	5,847,830	-1,006,972		

積立金特別会計

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2023年度までの積立額			20,000,626	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	繰 入 金 ・ 繰 出 金	1,000,000	391	21,000,235	定期預金を整理した利息を一般会計雑収入に繰り入れ
	定期預金元金振替分の利息	113		21,000,348	その他の利息は一般会計雑収入に繰り入れ

表 2 2025年度 理学部同窓会予算

一般会計

	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明	
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,000,000	0		
	終 身 会 費	4,000,000	4,000,000	0	新入生入学定員200名×20,000円	
	特別会費・寄付金等	1,000,000	1,000,000	0	会員等からの特別会費及び寄附金等(目標額)	
	他 会 計 繰 入 金	0	0	0		
	雑 収 入	80,000	88,817	8,817	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等	
	繰 越 金	1,774,802	1,146,789	-628,013	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金	
	合 計	6,854,802	6,235,606	-619,196		
支出の部	会 議 費	175,000	175,000	0	諸会議交通費、会場費等	
	広 報 費	2,160,000	2,160,000	0		
	「会報」発行費用	400,000	400,000	0	理学部同窓会誌「会報26号」印刷代 前年度決算額を参考	
	「理学部は今」発行費用	550,000	550,000	0	理学部機関誌「理学部は今」費用 前年度実績を参考	
	会員宛資料配送費	1,200,000	1,200,000	0	会員宛会報などの郵送料・運賃等 運賃改定・会員増を勘案	
	そ の 他	10,000	10,000	0	H P 運営費等(前年実績を参考)	
	事 業 費	1,280,000	1,180,000	-100,000		
	理学部支援事業費	800,000	700,000	-100,000	デジタルサイネージ補助費、卒業祝賀会補助費	
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	昨年度は2支部に補助	
	名 簿 編 集 費	10,000	10,000	0	(名簿作成業務は外部に依頼)	
	そ の 他 事 業 費	20,000	20,000	0		
	負 担 金 等	500,000	500,000	0	全学同窓会賦課金 500万円を学部定員数で按分+定額30,000円	
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円	
	事 務 諸 経 費	123,000	123,000	0	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、消耗品	
	事 務 局 費	500,000	560,000	60,000	事務局人件費 前年度決算を参考	
	人 件 費	0	0	0	後援会パートなし	
	他会計(積立金特別会計)繰出金	1,000,000	0	-1,000,000	2025年度は積立はしない(昨年度積立実績は1,000,000円)	
	予 備 費	656,802	1,077,606	420,804		
	合 計	6,854,802	6,235,606	-619,196		

積立金特別会計

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2024年度までの積立額			21,000,348	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	2025年度積立額	0	0	21,000,348	
	2025年度利 息	113	0	21,000,461	定期利息の内、定期元金に振替えられる分(前年並みを計上)

事務局より

1 理学部同窓会「総会」開催

2025年6月14日(土) 駅南キャンパス「ときめいと」において総会が開催された。

◎議事

- (1) 2024年度事業報告・決算報告(表1)・監査報告
・報告のとおり承認された。
 - (2) 2025年度事業計画・予算案(表2)
・提案のとおり承認された。
 - (3) 会則改正
・提案のとおり承認された。(ホームページ参照)
 - (4) 会長選出
・ 畠野弘通(前化学科支部長)が新会長に選出された。
- (※) 総会後、「理学部との懇談会」及び「懇親会」が行われ、有意義な意見交換が行われた。(写真参照)



2 2024年度事業報告

- (1) 広報活動について
 - ・会報25号(担当：生物学科支部)をはじめ、「雪華」23号及び「理学部は今」54号を会員に送付した。
- (2) 理学部からの要請にもとづく各種支援
 - ・令和6年度理学部国際交流事業(ICSNS)への事業補助を行った。
 - ・卒業祝賀会はコロナ禍前と同様に開催され、その支援を行った。
- (3) 全学同窓会との連携
 - ・賦課金・分担金を負担するとともに各種会議に出席し、運営に貢献した。
- (4) 会費及び寄付金
 - ・後援会と連携し、2024度新入生より会費を徴収した。
 - ・例年どおり多くの方から特別会費としてご寄付をいただいた。

会報25号の訂正

P.3 数学プログラム長のお名前は鈴木有祐の誤りです。お詫びし、訂正いたします。

編集後記

会報26号をお届けいたします。今号の編集は、化学科支部が担当いたしました。ご多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様には、心より感謝申し上げます。また、原稿の依頼や収集などにご尽力いただいた理学部同窓会事務局にも、この場をお借りしてお礼申し上げます。

会報の創刊は理学部同窓会設立翌年の1992年9月30日で、2004年7月10日発行の第6号からは毎年度発行となりました。現在のような横書きは第15号からで、それまでは縦書きでした。会報は同窓会HPにも掲載されていますので、ご覧ください。



理学部同窓会
ホームページは
こちらから

2025年度 理学部同窓会役員名簿					
役 職	支 部	氏 名	役職	支 部	氏 名
会 長	化 学 科	畠野 弘通	幹 事	化 学 科	本間 悟
副会長 (支部長)	数 学 科	轡田 勝祐			青柳 義昭
	物 理 学 科	麩沢 祐一		生 物 学 科	長谷川 博
	化 学 科	田邊 薫			荒木 勉
	生 物 学 科	藤原 昌晴			堀 昌明
	地質科学学科	豊島 剛志		地 質 科学 科	日野原達哉
	自然環境科学学科	尾原 祥弘			佐藤 壽則
	首 都 圏	安藤 勝利			渡部 直喜
	幹事長	地質科学学科		渡部 直喜	自然環境科学学科
幹 事	数 学 科	武石 文雄		加藤 直之	
		轡田 勝祐		柿原 芳章	
		田中 環		首 都 圏	安藤 勝利
	鈴木 重行	飛鳥 滋			
	物 理 学 科	坂井 章			信田 庸二
	化 学 科	笹川 民雄		監 事	数 学 科
		三ッ寄敏雄	自然環境科学学科		志賀 隆

離職された先生方（令和6年4月～令和7年3月）

転職 数学プログラム

蛭川 潤一（准教授）

在職期間：平成19年1月～令和7年3月

専門分野：数理統計学

転出先：南山大学理工学部データサイエンス学科 教授

退職 物理プログラム

松尾 正之 (教授)

在職期間：平成12年3月～令和7年3月

專門分野：原子核理論

転出先：なし(定年退職)新潟大学名誉教授、学系フェロー

転職 物理プログラム

奥西 巧一（准教授）

在職期間：平成12年11月～令和7年3月

專門分野：数理物理、物性基礎

転出先：大阪公立大学理学部 物理学科 教授

退職 地質科学プログラム

栗田 裕司 (准教授)

在職期間：平成13年4月～令和7年3月

專門分野：層序学

転出先：なし(定年退職)新潟大学学系フェロー

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内

T E L 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L <http://www.ridoso.jp/>